

銀杏の木遺跡の発掘

(高知県長岡郡本山町)

昭和 59 年 3 月

本山町教育委員会

序

銀杏の木遺跡の発掘調査は、昭和56年3月5日から3月8日にかけて実施されました。

この調査は、同和対策事業等で周辺の土地造成化が進んでいたため、遺跡の保存を目的として行なわれたものです。

調査は本山町教育委員会が主体となって、高知女子大学岡本健児教授、高知県教育委員会文化振興課宅間一之社会教育主事をはじめ、町文化財保護審議会委員、埋蔵文化財に关心をもつ町内外の有志の方々、地元の竹田瑞男氏などの協力により、大きな成果をあげることができました。

また報告書の刊行にあたりましても、岡本・宅間両先生の全面的な御協力をいただきました。

諸先生方をはじめ、この調査に御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げますと共に、今後、この報告書が考古学上の貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じております。

昭和59年3月31日

本山町教育委員会

教育長　畠　山　幸　一



本山町周辺の埋蔵文化財包蔵地

1. 上奈路遺跡
2. 横北高校校庭遺跡
3. 北山瀬ノ上銅矛出土地
4. 長徳寺址
5. 藏骨器出土地
6. 八反坪遺跡
7. 玉屋敷遺跡
8. 銀杏の木遺跡

目 次

I 遺跡と発掘調査の経過	1
II 層 位	2
III 発見された遺構	3
IV 出土 遺 物	4
V 本遺跡・遺物に関して	7

挿 図 目 次

- 第1図 銀杏ノ木遺跡所在地
2 遺跡周辺図
3 発掘区位置図
4 発掘区全図
5 地層断面図
6 貯蔵穴実測図
7 土壇実測図
8 壑穴址実測図
9 變形土器（A類・B類）
10 變形土器（A類・B類）
11 變形土器（A類・B類）
12 變形土器の底部
13 壺形土器
14 打製石包丁
15 石 鏈

図 版 目 次

- 図版1 遺跡全 景
遺跡東方の谷地形を示す
2 層位を示す
炉址の発見
3 石包丁・土器出土状況
遺構の発見
4 壑穴址と2つの土壇
打製石包丁の出土
5 貯 藏 穴
6 打製石包丁
7 打製石包丁未製品
8 打製石包丁未製品
9 石 鏈

I 遺跡と発掘調査の経過

銀杏の木遺跡は、長岡郡本山町本山1056番地に所在する。

この遺跡は、昭和56年1月26日、本山町教育委員会白石茂氏らによって、ヒビノキⅡ式土器片など20数片が発見されたことによって、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された。

周辺は宅地化がすみ、遺跡内も土地造成の可能性が生じ、本山町教育委員会は、昭和56年2月23日、文化財保護法第98条の2に基づいて発掘届を提出した。

調査は、昭和56年3月5日から8日までの4日間、本山町教育委員会が主体となり、高知女子大学岡本健児教授を担当者として、遺物が発見された水田約400m²を対象に実施された。

本遺跡は地番改正前の地名呼称として、本山村本山五区字銀杏ノ木(イチョウノキ)がある。よって調査団は本遺跡名を今後銀杏ノ木遺跡と呼称することとした。

遺跡は本山町中心部の西方約700mの所にあり、本山町の弥生遺跡として從来から知られていた横北高校校庭からは約1,300m西方に位置する。また遺跡は吉野川本流の右岸の河成段丘上に立地し、その標高は246mである。(第1図・図版1の上)

遺跡は吉野川の右岸水際より100m余の地点に在る。しかも、その周辺部は第2図にみる如く最近は町営の住宅が数多く建てられるようになり、このままでは遺跡の調査が困難になる事も考えられ、今回の調査と相成った。



第1図 銀杏ノ木遺跡所在地

遺跡付近の地形をよく観察すると、旧地形を示すものが残存している。発掘区の東方には谷にのぞむ微高地が形成され、その一部が残っているが、発掘区はその自然の作った谷（図版1の下）の西側の微高地上にあり、発掘区はその微高地の東端とみられる。よって本遺跡は今回発掘した発掘区の西側に拡がり、すでに宅地化した地区に拡がっているとみるべきであろう。これらの宅地は、すでに遺跡発見以前に築造されたものである。今日では調査は困難である。ただ遺跡埋蔵の深度が深いので、宅地造成において地下の遺構は破壊されていないと推考している。

発掘区は第2図を参照されればわかるように、住宅地に近い部分の水田の中で最も標高の高い地点を選んだ。第3図は発掘区を今後において、より明確にしておくため遺跡の北東を走る道路よりの距離等を示した図である。そして第4図は発掘区全図である。

II 層位

発掘の結果、発見された遺構について序述する前に、この付近の層位を明確にしておく必要がある。第4図にみる発掘区の北東部の幅4.5mのP-P'の部分に断面を作り、その部分でこの発掘区およびその周辺の層位を確認した。第5図および図版2の上はそのP-P'における層位断面図である。層位は第1層（表土層）は黒褐色腐植土層である。深さ40~54cm程度である。この層が水田の耕作土である。この水田は深田で湿田である事を付近の人たちの談話から知った。この第1層から中世、室町時代の備前焼鉢片と江戸中期とみられる備前焼鉢片が含まれている。

第2層は緑色片岩の小礫混りの青灰色粘質土層で、水田の盤として置かれた地層とみるべきであろう。普通の水田におかれた盤よりも厚く、30~42cmの厚さを持つ。深田で湿田の関係から、このように厚い盤を作ったのであろうか。この第2層からも遺物が発見されている。遺跡の北部地区では弥生後期のヒビノキⅡ式土器に近似する土器片が混在していた。これは水田の盤を作る際に、第2層に混入したものであろう。

第3層は黄褐色粘質土層で深さ18~30cmである。この層には、ところどころに酸化鉄の混入がみられる。また、この第3層は発掘区には一面にみられる層であるが、遺跡の南西部の水田では、この層を欠ける。遺跡の南西部の水田における層位については後述する。

無遺物層である第3層下の第4層は黒褐色砂質土層である。深さ10~18cmで他の層にくらべると浅い。この層が弥生時代終末期のヒビノキⅡ式土器に近似する土器の包含層である。そして、この期の遺構は次の第5層の黄褐色粘土層の最上部を切り込んで作っている。

第5層の黄褐色粘土層はいわゆる地山とみられ、その深さはその1部を試掘したが2m以上の深

さを持っていて、最下部は発掘が困難なため確認が出来なかった。

さて、先述した南西部の水田の層序についても紹介しておこう。南西部の第1層（表土層）は、遺跡の存する北東部と同じ黒褐色腐植土層であり、その深さは約20cmである。南西部の第2層は黒灰色土層であり、深さは30cmである。この第2層からは散発的に土師質土器（かわらけ）の経片が8片ほど発見されているが、実測図に掲げる事の出来難い程度のものであった。

南西部の第3層はシルト質褐色土層である。この層は遺跡の存する北東部の第5層である黄褐色粘質土層に対照する層とみてよい。この層も地表下3m以上での深さまで発掘をしたが、同一の層が続き、その最下の部分まで追求する事は出来なかった。

以上述べたように南西部の第3層と北東部の第5層の違いは、古い時期（南西部の第2層以前—室町時代以前）において、南西部が自然の谷の地形を形成していたがためであると筆者はみている。

III 発見された遺構

第4層の黒褐色砂質土層中にヒビノキⅡ式土器に近似する土器片が含まれる。やや完形を保つものは1個（第13図の25）しか発見されていない。遺構の1部（炉址）とみられるものが発掘区の1部で確認されたので、それ以降は発掘区を第4図にみる如く、A・B・C3区に分って精査した。その結果、A区より炉址と考えられる焼土が2個所にわたって発見された。（図版2の下）この炉址は野外の炉址であろうか。（第4図の1地点と2地点）この炉址と同一の平坦面で4地点から打製石包丁が発見されている。また3地点では弥生土器片が多く発見され、土器片の中に石鍬1個も含まれていた。5地点からは自然石の台石に使ったとみられるものが出土した。（図版3の上）

B区では貯蔵穴が7地点で発掘され、炉を持ち、柱穴の少ない小形の堅穴住居（多分工房址であろう）が8地点で発見された。（図版3の下）これらの貯蔵穴と堅穴住居の中間には変形の土壙（9地点）も発掘された。（図版4の上）この土壙は後世の擾乱によって出来た掘込みであるかもしれない。6地点からは打製石包丁が出土した。（図版4の下）

C区よりは遺構は全く発見されなかった。B区より発見された貯蔵穴・土壙・堅穴住居については以下追加して述べよう。

貯蔵穴 檜円形に近い平面形をなし、1.3m×1.3mの大きさである。本遺跡では遺構検出面が第5層の上面でないとつかないので、各遺構はその底部近くしか残っていない。貯蔵穴は第5層 黄褐色粘土層面を、わずか4cm程度に切り込み、貯蔵穴中央部で8cm程度の深みを持つにすぎない。このように遺構の検出面が底部近いので、貯蔵穴からの遺物の検出はなかった。（第6図・図版

5の上)

土壤 変形の土壤で $1.6\text{ m} \times 1\text{ m}$ の大きさである。変形土壤も貯蔵穴同様に第5層黄褐色粘土層面を 4 cm 程度掘り込んだものである。土壤内面は平坦であり、貯蔵穴とは異なっている。(第7図)

堅穴址 やや変形の隅丸方形の堅穴住居址の型態をとる。 $3.08\text{ m} \times 2.58\text{ m}$ と小形である。また柱穴も中央炉址ぞいに1個、そして壁に接していま1個あるにすぎない。以上のような諸点から住居址とは考えられず、むしろ工房址的な堅穴址であろう。堅穴址内の炉址は大きく、 $1.04\text{ m} \times 0.92\text{ m}$ の椭円形をなす。内部には灰と木炭が充満していた。堅穴址からも遺物は全く発見されていない。この遺址も第5層黄褐色粘土層の切り込みが少なく、 6 cm 程度の切り込みである。柱穴で黄褐色粘土層表面からの切り込みは 10 cm 程度である。よって以上紹介した全ての遺構は、黄褐色粘土層の上部である第4層の黒褐色砂質土層から黄褐色粘土層上部にかけて遺構を作っていたと考えられる。しかし黒褐色砂質土層での遺構の検出はむつかしく、第5層上部ではじめて遺構の確認が出来たのである。(第8図・図版5の下)

N 出土遺物

発掘によって出土した遺物は弥生土器とそれに伴う石器、そして数的に少ない室町時代の土鍾・土師質土器・備前焼破片である。以下これらについて紹介しよう。

弥生土器

出土した弥生土器は器形として、變形土器と壺形土器がある。図示しているように變形土器の出土が多く、壺形土器の出土は少ない。

變形土器(第9図～第12図)

褐色ないし赤褐色を呈し、焼きのあまいものと堅緻に焼いたものとがある。白い砂粒子を混入し、きめの細かい粘土を使っている。図示した變形土器は、その全てが口縁部であり、なかに量的に少ないが下胴部までのものもある。變形土器の使用を物語る土器として第9図4の土器は、器表面に煤が付着していた。

本遺跡出土の變形土器は頸部のカーブの在り方と全体の器形とからこれをA類・B類・C類と3類に分類することができる。

A類(第9図1・3・4、第11図9・11)

口縁部周辺の器形は頸部が「く」の字状に屈折し、口縁は開き、端部は両端に小さな跳上り状をなすものもある。器肉はやや薄手で、内外面に指頭による調整痕を残している。「く」の字状に屈

折した頸部以下は口径以上に肩部が張り、肩部の器肉がやや厚めになっている。頸部から肩部にかけて、1部に刷毛目調整のあとを残している場合もある。

B類(第9図2、第10図7・8)

頸部の屈折のゆるやかなタイプである。指頭圧痕や刷毛目痕のみられるものである。

C類(第10図5・6、第11図10)

口径の大きさに比して胴部の張りの大きいとみられるものをC類とした。器の内外面に、特に口頸部から頸部に叩目の痕を残す。また指頭圧痕も残っている。口縁上端面はとがり気味のものもある。なお第10図6の土器は口縁部の外面に指ナデのあとがあり、肩部全体には叩目は存しない。ただ器内面で板状工具をおしつけたような痕跡が残っている。

底部(第12図)

壺形土器の底部は第12図に集めた。全般的に底部が小さく、なかには尖底・丸底出現直前の姿を示すものもある。しかも底部は厚みを持つものは割合に少なく、第12図の16が厚みをみせるものである。また底部は完全な平底でなく、わずかであるが上り底風に作っている。底部近くには叩目痕のあるものは全くなく、指頭圧痕と刷毛目を見るものが多い。

壺形土器(第13図)

壺形土器の口縁部は、その出土をみなかった。ただその底部は壺形土器の底部と同様に小さい。しかし、なかには第13図24にみるが如き大きな底部を持つものもある。これなど大形の壺形土器とみられる。底部近くにおける調整痕は刷毛目と指頭圧痕のみられるもの、それに叩目痕のあるものもある。壺形土器の底部は壺形土器の底部と共通して平底であるが、尖底に近い程小さな平底や安定の悪い丸味のある平底などがみられる。

第13図の25の壺形土器は、口縁部を欠ぎ胴部から底部までである。器形からみて丸底に近い土器であるが、径3cm程の平底部を形成している。内外面の器面調整に指頭を引っ張った痕がある。また外面には1部刷毛目痕も残っている。

石器

以上の弥生土器と同一の包含層中にある、また遺構周辺から以上述べた弥生土器片と伴出したとみられる石器として、打製石包丁と石錐がある。

打製石包丁(第14図・図版6・7・8)

3個の石包丁が出土している。先述したように遺構の存した面の4地点・6地点から、それぞれ第14図の1の石包丁と2の石包丁が出土している。1の石包丁は網雲母角閃片岩で作られていて、緑色に網雲母特有の輝きを持つものである。横最大長8.4cm、縦最大幅4.3cmであり、最厚部の厚さ0.9cm、紐をつける抉りを左右に持つ。刃部は下部に打製で作られる。使用時の刃こぼれもみら

れる。先述したように 4 地点より出土す。

2 の石包丁は網雲母紅麻片岩製で、小豆色の輝きを持つものである。6 地点より出土し、片面のみに抉りを持つ。刃部は作り出しているが抉りのない片面には刃部の作り出しあはない。圓の断面をみると下部に刃部が無いように見えるが、これはたまたま刃部を欠いている部分の断面を取ったためである。この点、刃部は抉りのある部分に近い所だけにみられる事から、未製品の打製石包丁であろうか。最大長 9.7 cm、縱最大幅 6.4 cm、最厚部の厚さ 1.1 cm である。完成時の大きさは 1 の石包丁程度になるのであろう。

3 の石包丁は第 4 層の包含層に含まれていたもので、石質は緑泥角閃石片岩であり、緑色に輝きを持つものである。第 14 図 3 の右端は石包丁としての形作りを終了し、これから抉りを入れようとする段階のもので、その点これも未製品と考えてよからう。刃部もかなり作り出しているが、完成したものではない。最大長 7.5 cm、最大幅 5.4 cm、最大厚部の厚さ 1.1 cm である。

石錘（第 15 図・図版 9）

2 個の石錘が発見されている。第 15 図の 5 の石錘は緑泥片岩製で、先述したように 3 地点より出土している。第 15 図の 4 の石錘は網雲母片岩製で、遺跡発掘区の南約 15 m 離れた地点を試掘した際に単独に堆土中から発見されたものである。この石錘は從来余り見ない形式のものである。細長い扁平な自然石の長い一辺の中央部を両面から打ち欠いだもので、この部分から背の平坦面に紐をかけ魚網の錘りとするものである。

4 の石錘は長さ 7.9 cm、最大幅 2.5 cm、最大厚部の厚さ 0.7 cm である。5 の石錘は長さ 5.9 cm、最大幅 2.1 cm、最大厚部の厚さ 0.6 cm である。

その他の出土遺物

弥生時代の遺構出土面から、石器工作台石とみられる自然石の大きな礫が A 区 5 地点より出土している。34.4 cm × 17 cm の大きさで、厚さ 6.4 cm の緑色片岩である。（図版 3 の上） 上坦面は研磨したように見えるが、人の手は加わっていない。蔽打痕もみられないで、あるいは台石としての使用も否定されても無理からぬものである。

弥生時代の遺物の他に、遺跡発掘区の表土層を排除した際に 1 個の土錘が発見されている。この表土層中に中世・近世の備前焼破片も出土しているので、この土錘は中世のもの、それも備前焼が室町時代の掘鉢であるので、室町時代のものと考えてよからう。土錘および備前焼破片は普通一般にみられるもので、あえて図示しなかった。また遺跡西南部の水田の 1 部の層序をみるため、テスト・ピットをあけたが、その際第 2 層の黒灰色土層から 8 片の土師質土器の細片も発掘している事は先述した。実測図で図示出来るようなものでないので、これも記述するにどめたい。糸切底のみられる小皿破片で、室町時代のものとみるべきものである。

V 本遺跡・遺物について

本遺跡発掘の結果と出土遺物の整理・分析を通じて、次の如き種々の事が判明し、また推考され得る事もあった。これらの事を4項目にまとめて述べてみよう。

1. 遺構を中心

出土の堅穴址については、先述したようにその大きさや柱穴の数などから工房址ではないかと論じた。工房址なるがゆえに柱穴も少なく、屋根も堅穴住居址のように複雑な構造を取らなかったのであろう。堅穴址の中において炉址の占める割合が大きいのは、弥生前期の工房址である西見当遺跡（南国市）の堅穴址—工房址—の例がある。

（註1）

銀杏ノ木遺跡における工房址より出土遺物は全く出土しなかったが、工房址周辺のB区出土の未製品である石包丁などは、この工房址にあって作られていたものであろう。石包丁と同じ石材片が工房址の周辺から出土している事も申し添えておこう。

貯蔵穴も、その位置から工房址に付随するものと考えてよかろう。この遺構からも遺物は出土しなかったが、工房址で製作する石器の原材料はこの貯蔵穴に据え置かれたのでなかろうか。A区の2つの焼土・木炭塊は野外炉とみてよかろう。何かを製作するに関連して工房址外で火を燃す事の必要性から、このような炉址風のものが残ったのであろう。

2. 出土弥生土器について

本遺跡出土の弥生土器は、頸部が「く」の字形に屈折し、底部が非常に小さな平底である事、さらに全く無文である事など、弥生後期終末のヒビノキⅡ式土器ないしは高知県西部に分布する芳奈Ⅲ式土器に併行関係にある土器とまずみて誤りないと考える。

ただ本遺跡出土の土器には、器面に叩目痕を残すものがある。その点では弥生後期末に県東部に分布するヒビノキⅡ式土器に近く、叩目痕を持たない芳奈Ⅲ式土器には遠いものであると言う事ができる。

これらのことから本遺跡から出土した土器の明確な位置づけをするため、叩目痕を土器面全面にみるヒビノキⅡ式土器と本遺跡出土土器とを比較検討する必要がある。ヒビノキⅡ式土器の變形土器は、口縁端より底部にかけて、または頸部から底部にかけて叩き技法による叩目痕を残す事で、その特色となす事ができる。それに比して本遺跡の變形土器は、ヒビノキⅡ式土器と異って叩き目痕を残す土器は、變形土器A・B・C類のうちC類だけであって、それも口縁部から頸部にかけてのものだけである。そして、また特に注目すべき事は、壺形土器の底部近くに叩目痕を持つもの時に存する事である。

このようにみると、本遺跡出土の弥生後期末とみられる土器は、厳密に言って壺形的ヒビノキ

Ⅱ式土器の概念の中に入れられない独自のものである。さて現在までに確認したヒビノキⅡ式土器とみられる土器型式の出土遺跡は、次のような。

香美郡土佐山田町百石町ヒビノキ遺跡（註3）

香美郡土佐山田町繁藤鷦古屋岩陰遺跡（註4）

香美郡土佐山田町逆川龍河洞洞穴遺跡（註5）

香美郡土佐山田町林田遺跡（註6）

安芸市井ノ口清近岡遺跡（註7）

南国市国分土佐国分寺寺内遺跡（註8）

南国市田村遺跡群第12地点（註9）

南国市東崎五軒小屋遺跡（註10）

南国市三島遺跡（註11）

その他にもヒビノキⅡ式土器は出土しているが、ヒビノキⅡ式土器がその遺跡において主体的であるかどうかが危ぶまれる遺跡である。例えば吾川郡春野町秋山山根遺跡において、確かにヒビノキⅡ式土器の變形土器が出土しているが、これは単に1個の出土で、この土器が県東部より持ち込まれた土器の可能性も考えられるのである。これらの事も考慮に入れて、現在筆者が確認しているところでヒビノキⅡ式土器の分布範囲は、物部川流域の南国市・土佐山田町を中心とする下流・中流地域、そして東部の安芸平野もその中にに入る。結局物部川下流・中流の流域平野を含めて、それ以東に分布するという事になる。

今後高知県の考古学をよりきめ細かい観点でみていく必要上、土器の細かい型式的特色を追し、併せてその分布等も細かく論じなければなるまい。

さて、ヒビノキⅡ式土器は先述したように分布し、これが吉野川上流域の嶺北地方に及んでいない事が判明した。もちろん本報告の主体である銀杏ノ木遺跡の弥生土器は、ヒビノキⅡ式土器そのものでない。そして銀杏ノ木遺跡に近い嶺北高等学校校庭遺跡出土の弥生後期末の土器も、叩目痕を持つ土器は量的に少なく、これもヒビノキⅡ式土器ではない。この事は吉野川上流域における弥生後期末の土器が叩目痕は1部にみられるがヒビノキⅡ式土器そのものでなく、やや異った土器型式であることを物語っているのである。よって、このような弥生後期末の型式土器は本遺跡名となり、銀杏ノ木式土器と呼称し、ヒビノキⅡ式土器と分離したいと考えているものである。

これによって現段階の高知県の弥生後期末の弥生土器は、東部のヒビノキⅡ式土器、吉野川上流域の銀杏ノ木式土器、そして県西部の芳奈Ⅲ式土器が存する事になる。ここで問題になるのは、高知平野と吾南平野、さらに高岡郡東部におけるこの期の土器が、これら3型式土器のうちのどれに属するのか、あるいは全く別の新型式の土器なのかという事である。

本遺跡出土の土器論の最後に、本遺跡出土の土器が量的に甕形土器が多く、壺形土器が少なく、かつ高杯形土器および鉢形土器、さらに碗形土器が存しないのは発掘区が工房址とその付近に限定されたためである事を付言しておきたい。

3. 出土石器について

県東部に分布する弥生後期末のヒビノキⅡ式土器は伴出の石器がほとんどみられず、林田遺跡のごときは多量の鐵鎌・鐵刀子等が数多く伴出している。また西部に分布する芳奈Ⅱ式土器も、ほとんど石器が伴わない。ところが同じ弥生後期末であって銀杏ノ木式土器には打製石包丁が伴い、かっ石鎌が伴出するのである。この事実を如何に考えるべきであろうか。

ヒビノキⅡ式土器に先行する弥生後期後半のヒビノキⅠ式土器と芳奈Ⅰ式土器に先行する芳奈Ⅰ式土器には、粗雑な打製石包丁が伴う。しかし本遺跡ではそれらより後出の土器型式、それも弥生終末の土器に伴うのである。

これは土佐では山間部である吉野川上流域の後進性が、このような特殊な現象を生んだのではないかとみる。香長平野より以東の地域では、畿内とあってもよい土器における叩き技法を持ったヒビノキⅡ式土器がある。この土器に代表される文化は、発掘の成果によれば、すでに石器は姿を消し、多くの鉄器を持っている。これらの鉄器は畿内や瀬戸内の先進地から移入されたものであろう。県西部の幡多地方にみられる芳奈Ⅱ式土器に代表される文化は、まだ鉄器の出土例はみないが、石器の出土例がないところをみると、それこそその地理的な位置と芳奈Ⅱ式土器の特色から、九州あたりから鉄器が移入されたと考えてよいのでなかろうか。これに対し銀杏ノ木式土器に代表される文化は、土佐の山間部の吉野川流域にあって、香長平野からも遠く離れるために鉄器の移入も充分でなく、それを補う意味で1部の石器が残存したのでなかろうか。そして、それは打製石包丁である。この石包丁の存在は、土佐の吉野川流域の弥生後期末の文化的後進性を物語るものである。また石鎌も、従来多くみるものと異なる独特の形のもので、これもまたその後進性を示すものである。

4. 最後に

嶺北地方には弥生後期末の遺跡が最近発見され出した。それらの諸遺跡のうち、立地の点で本遺跡と同一のものは嶺北高校校庭遺跡であろう。ともに吉野川に沿う河成段丘上の集落址とみられるが、これらの集落に伴う水田はどのような場所に営まれたのでなかろうか。今回の調査で判明したのであるが、吉野川の河川に沿う小高い河成段丘上に集落があり、この集落の近くに存在する幾つもの小さな浅い谷が存する事が判明した。このような浅い、そして湿润な谷の1部を当時の水田として利用したのでなかろうか。しかし、そのような谷利用の水田は面積も狭く、収穫も量的に少なかつたろう。この収穫量の不足を補うために、弥生後期であれば稗なども存したと思われるが、考古

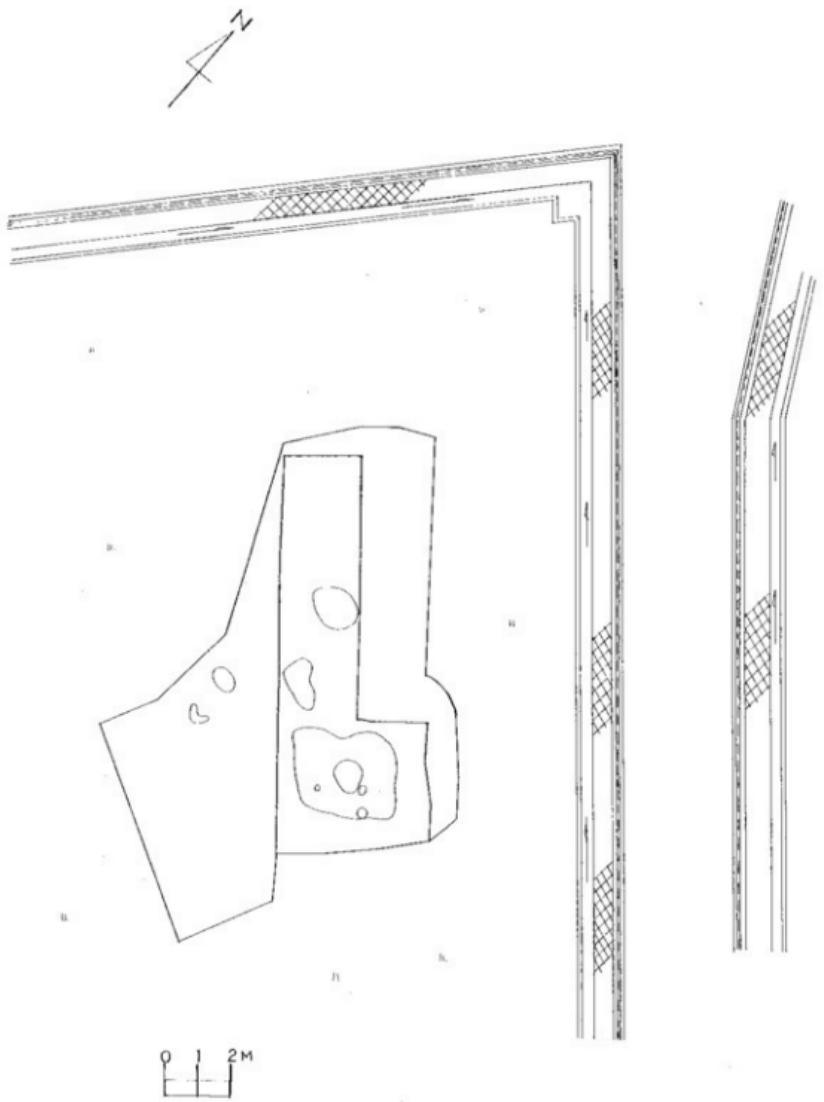
学的にこれを裏付けるものはなかなか出土しない。なお、中・近世の遺物がごく断片的に出土しているが、これらはその時代の雑器類である事を申し添えて纏筆しよう。

註

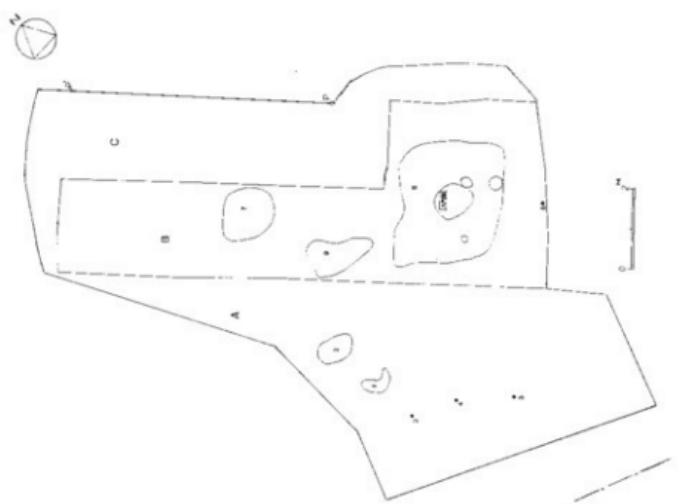
1. 南国市教育委員会『高知県西見当遺跡（B、C区）の発掘』昭和51年
2. 岡本健児「南四国における町目のある弥生土器と土師器」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻）昭和57年
3. 土佐山田町教育委員会『ひびのき遺跡』昭和52年
4. 日本道路公団・高知県教育委員会『飼古屋岩陰遺跡調査報告書』昭和58年
5. 高知県教育委員会『龍河洞』（『高知県文化財調査報告書』10集 昭和34年）
6. 土佐山田町教育委員会『林田遺跡現地説明会資料』（パンフ）昭和58年
7. 安芸市教育委員会『高知県安芸市清近岡遺跡発掘調査報告書』昭和54年
8. 岡本健児・廣田典夫・宅間一之『土佐國分寺庫裡改築に伴う発掘調査概報』昭和54年
9. 宅間一之「高知県における発掘調査の成果—昭和54・55年度を中心として」（『海南史学』19）昭和56年
10. 高知県教育委員会「五軒屋敷遺跡現地説明会資料」（パンフ）昭和58年
11. 岡本健児「弥生後期時代」（『南国市史上巻』）昭和54年
12. 春野町教育委員会『山根・石屋敷遺跡』昭和51年
13. 本山町教育委員会「上奈路・横北高校校庭出土の遺物群」（『長徳寺址発掘調査報告書』）昭和52年
14. 註6と同じ

第2図 遺跡周辺図

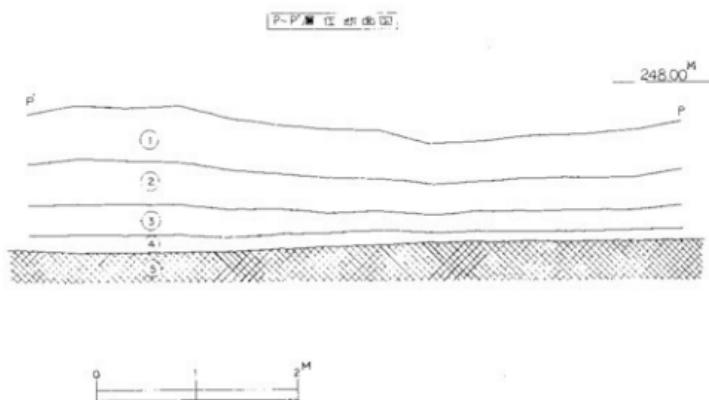




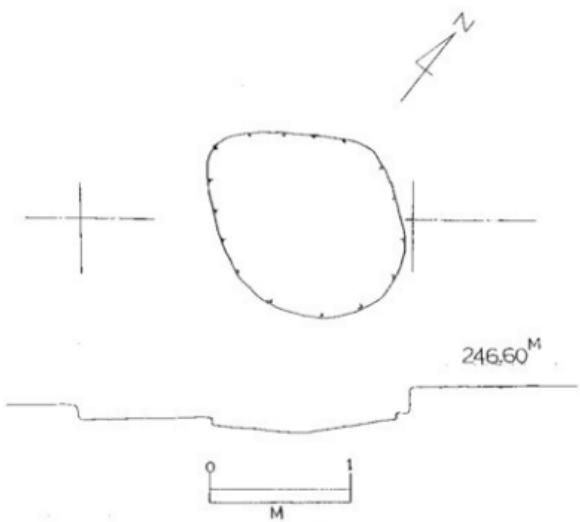
第3図 発掘区位置図



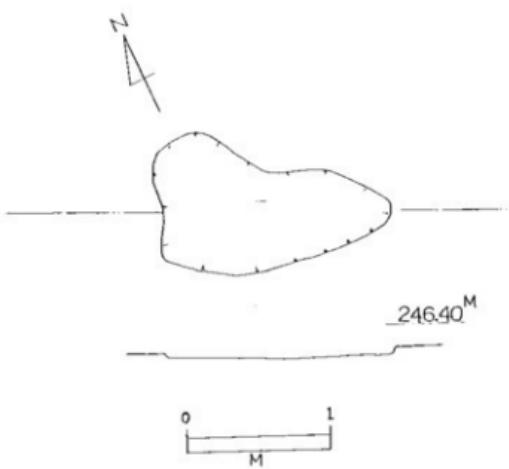
第4図 発掘区全図



第5図 地層断面図

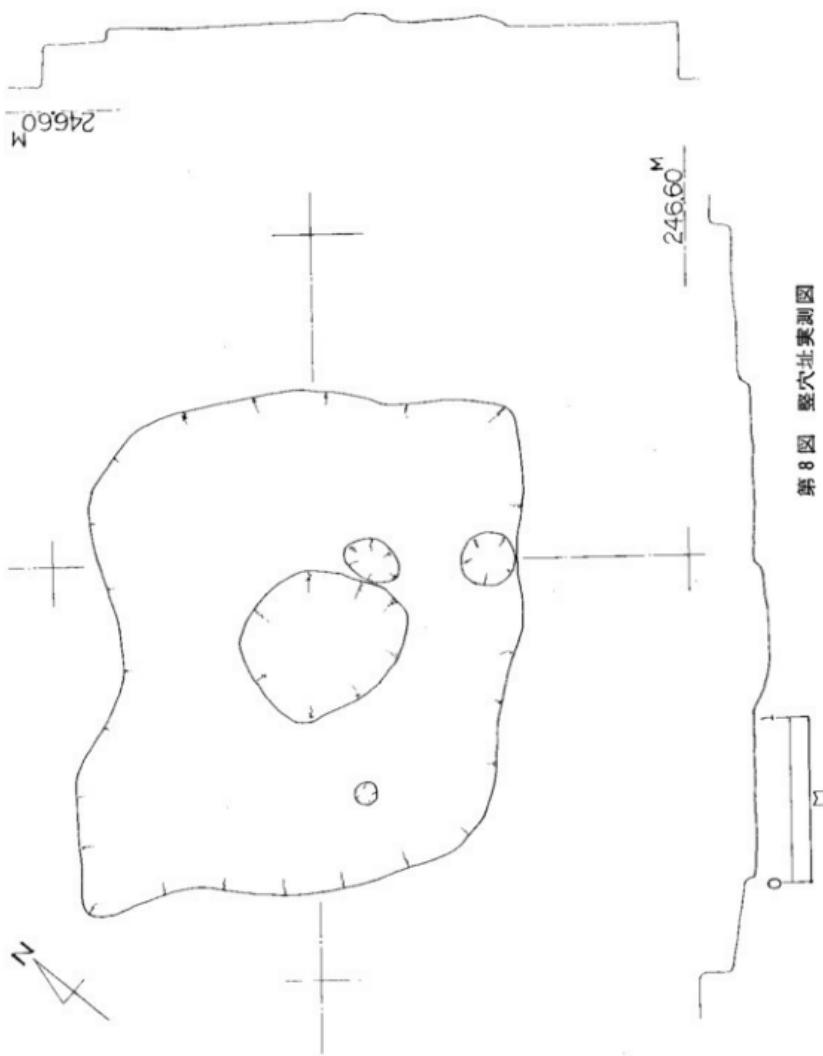


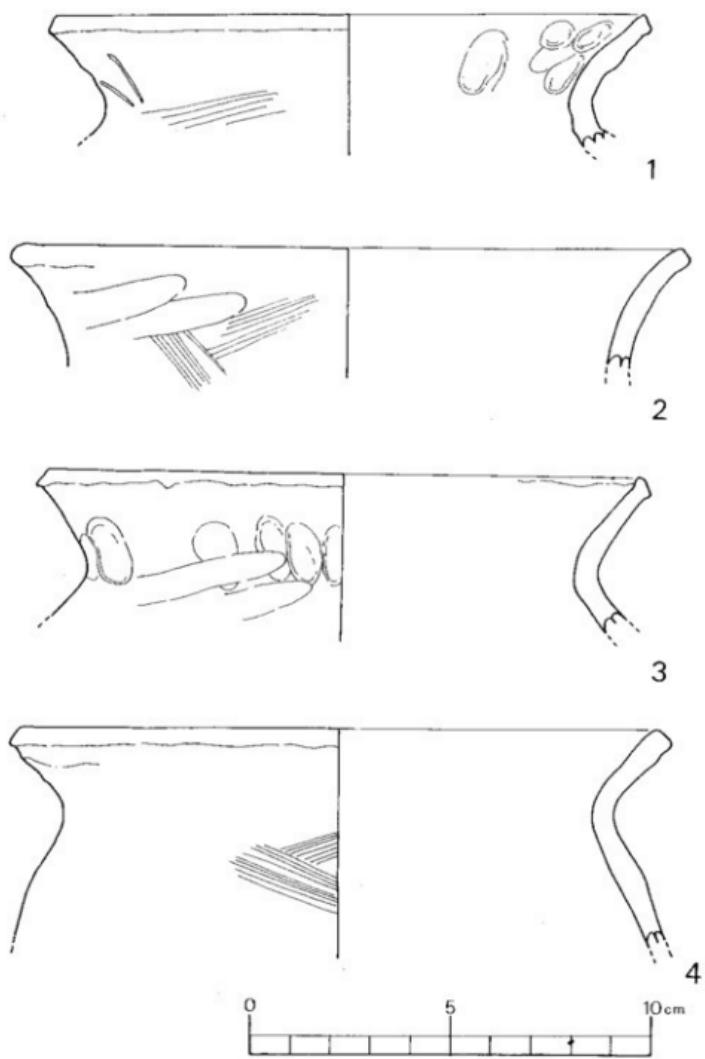
第6図 貯藏穴実測図



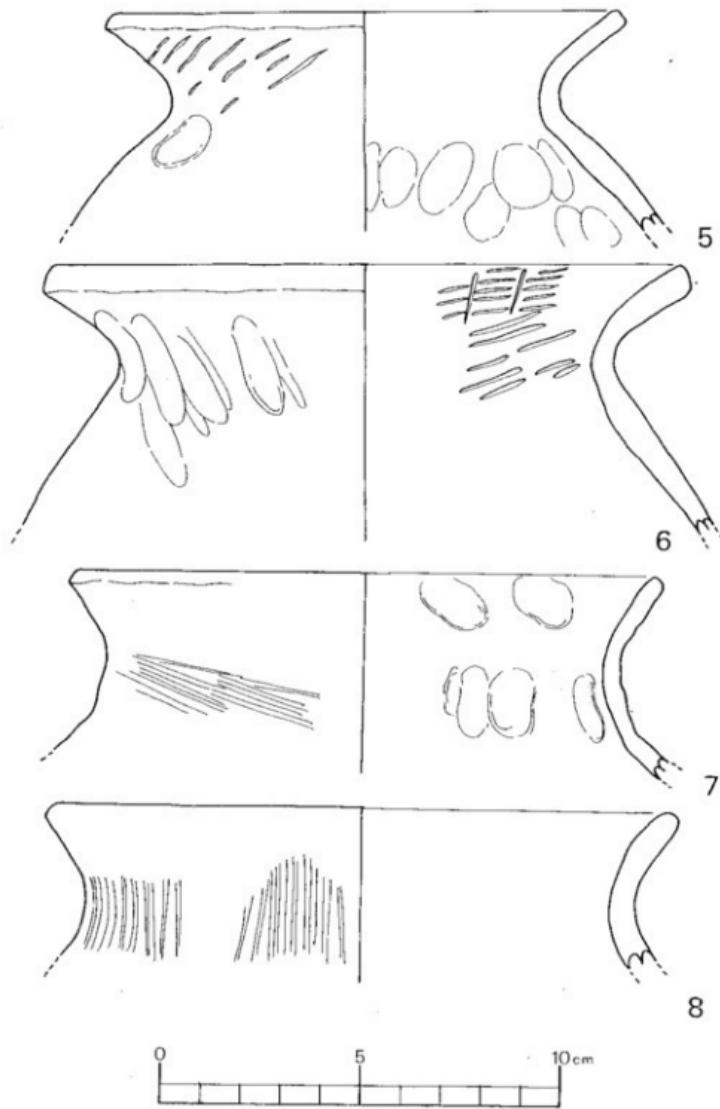
第7図 土壤実測図

第8図 案穴址実測図

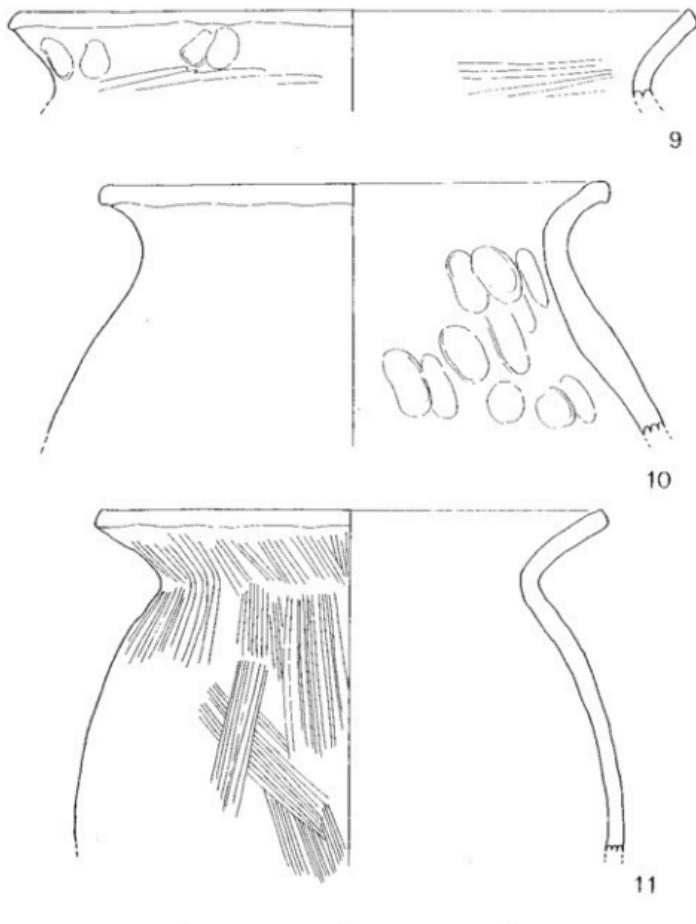




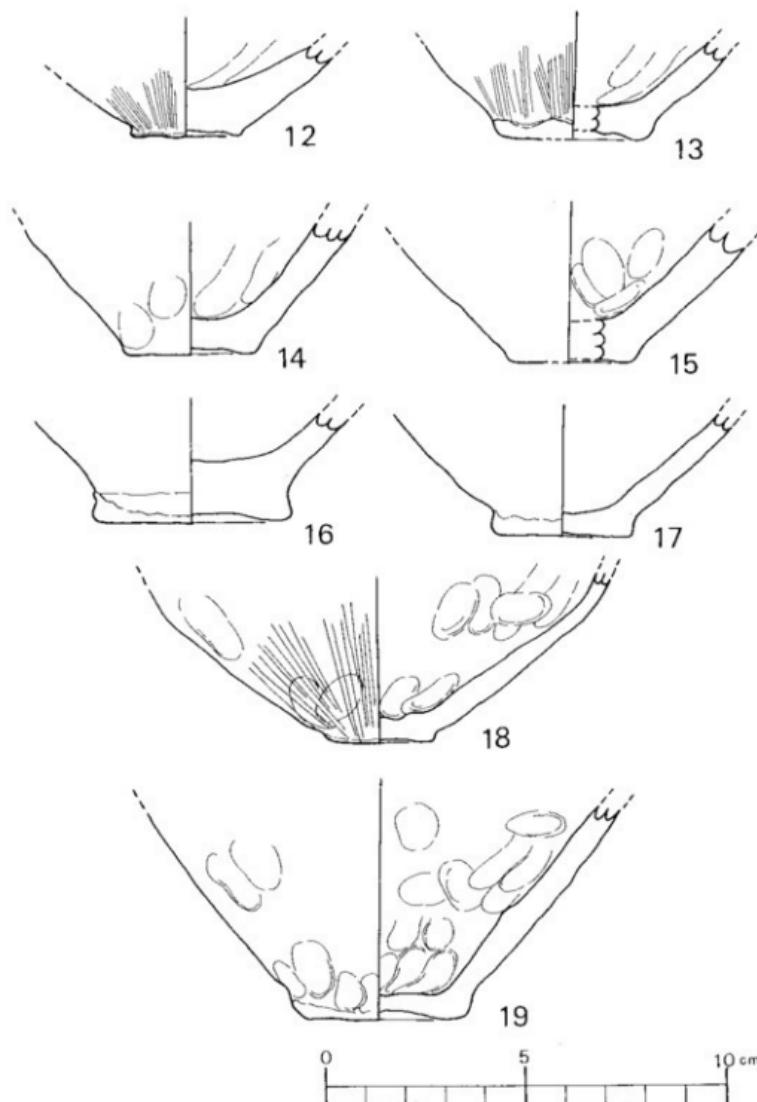
第9図 塗形土器（A類・B類）



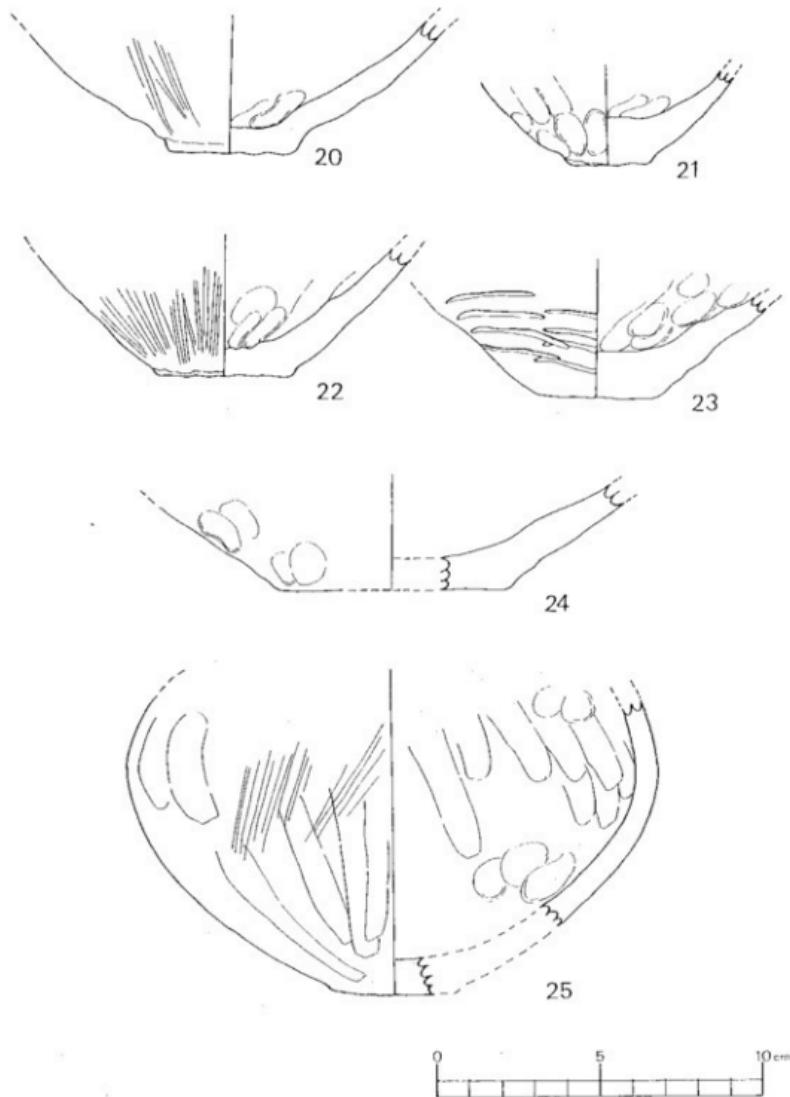
第10図 装形土器（A類・B類）



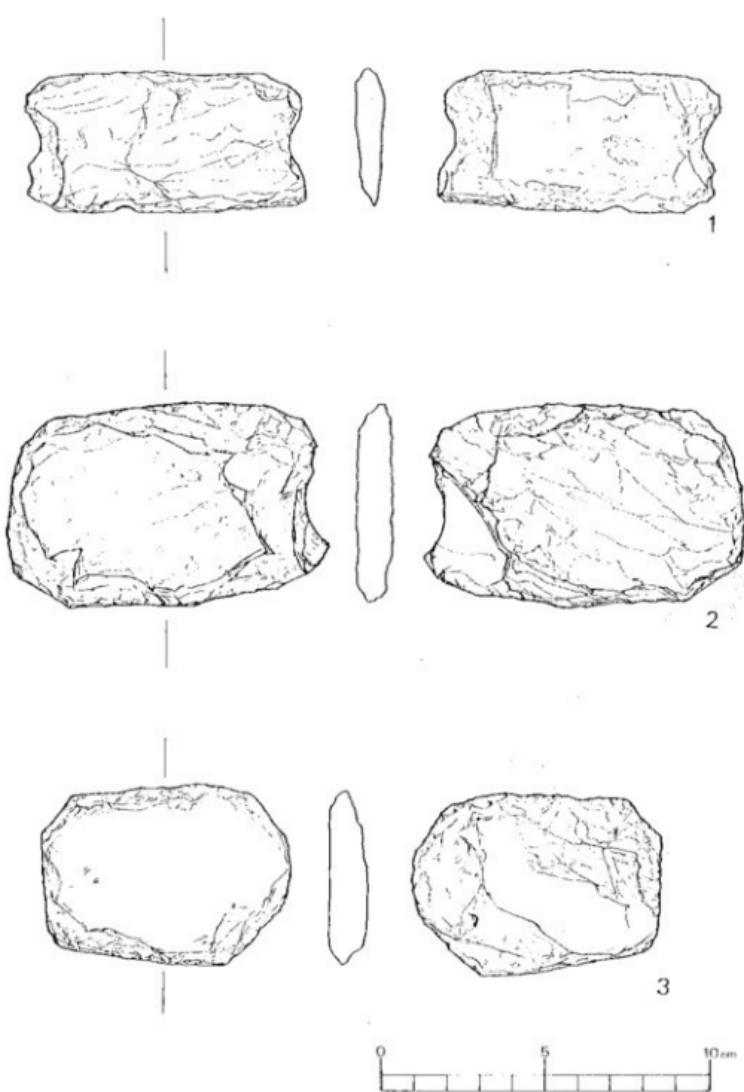
第11図 遷形土器（A類・B類）



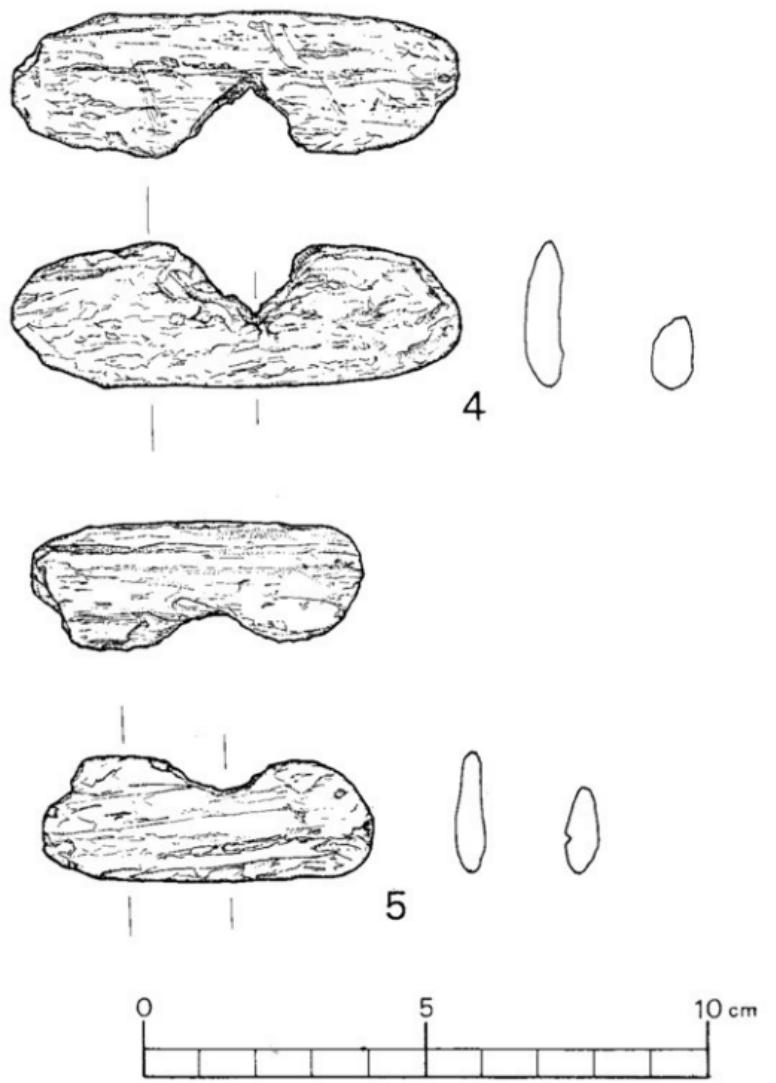
第12図 塵形土器の底部



第13図 壺形土器



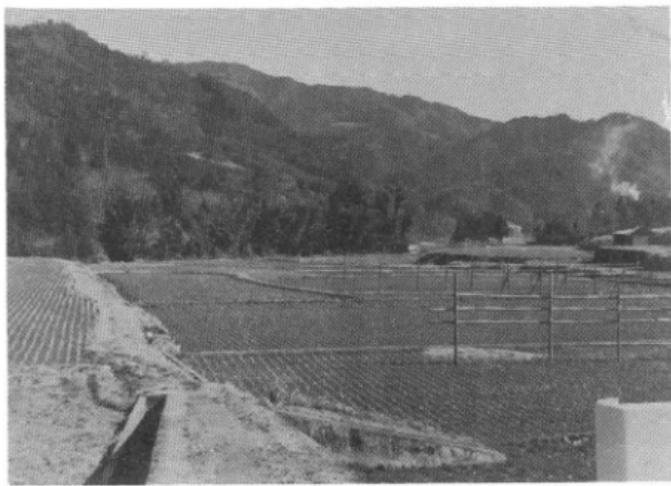
第14図 打製石包丁



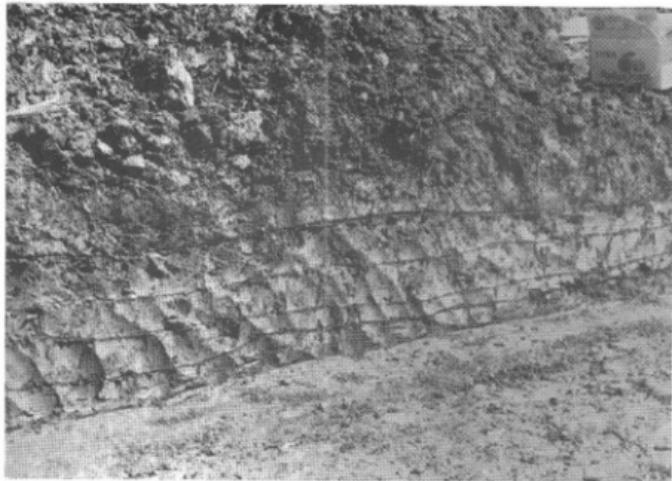
第15図 石錘



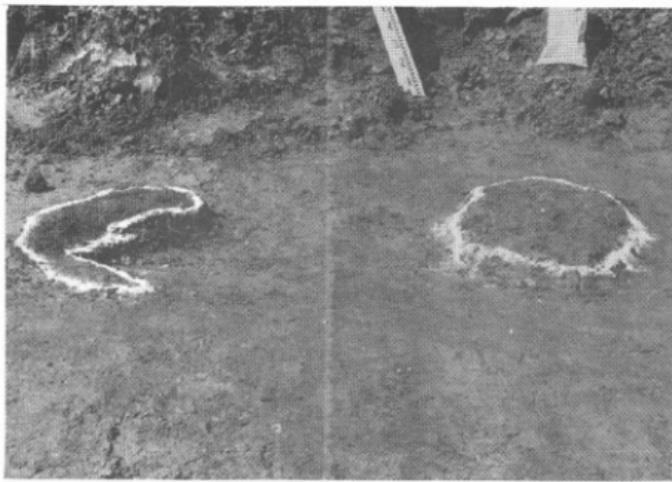
遺跡全 景



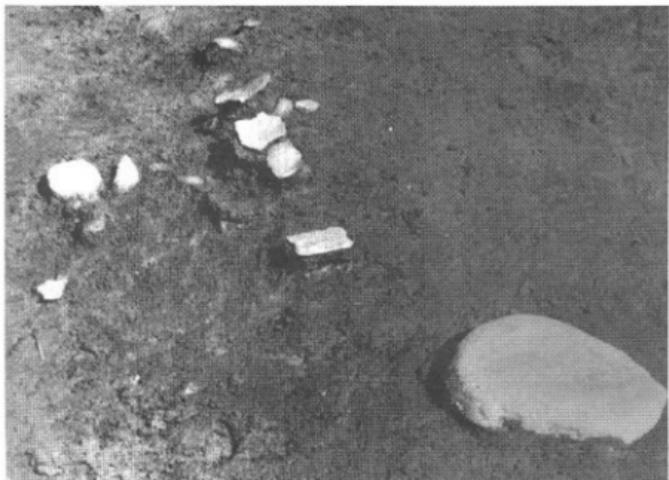
遺跡東方の谷地形を示す



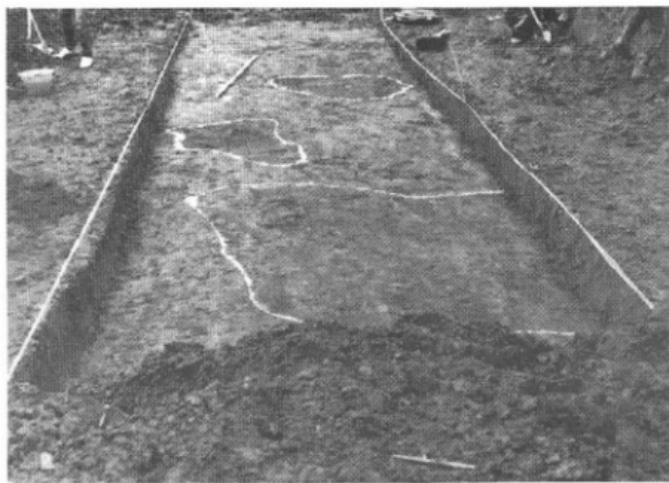
層位を示す



炉址の発見



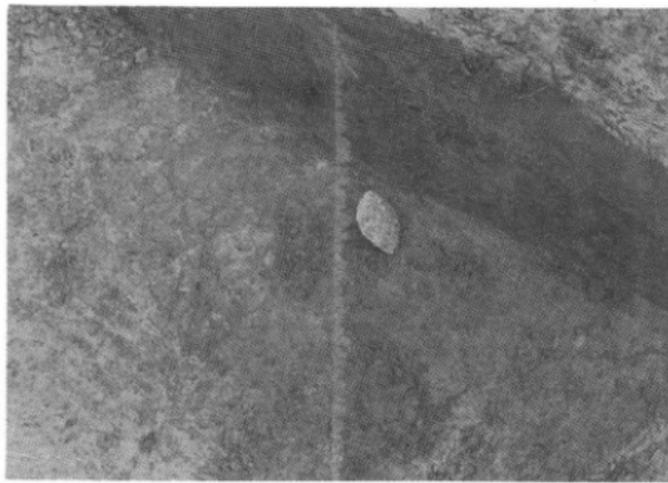
石包丁、土器片出土状況



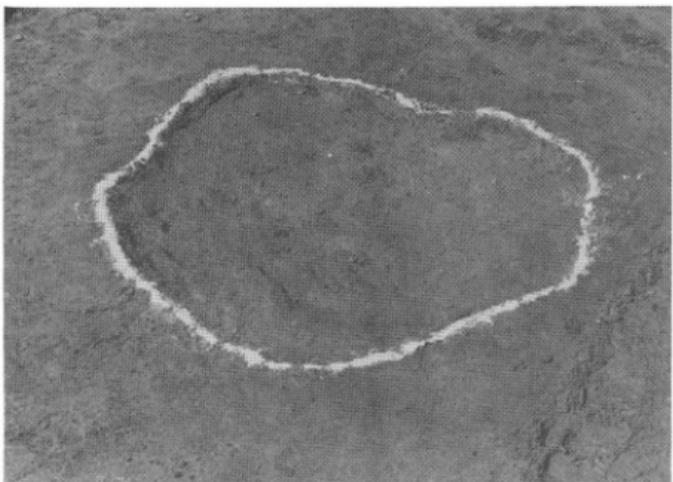
遺構の発見



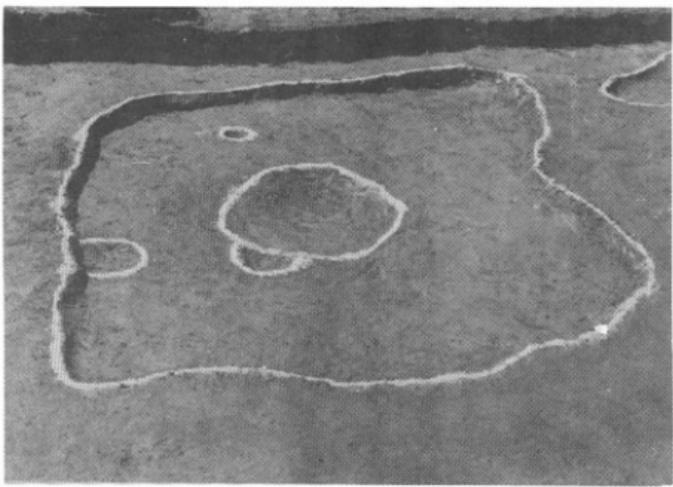
竪穴址と 2 つの土壙



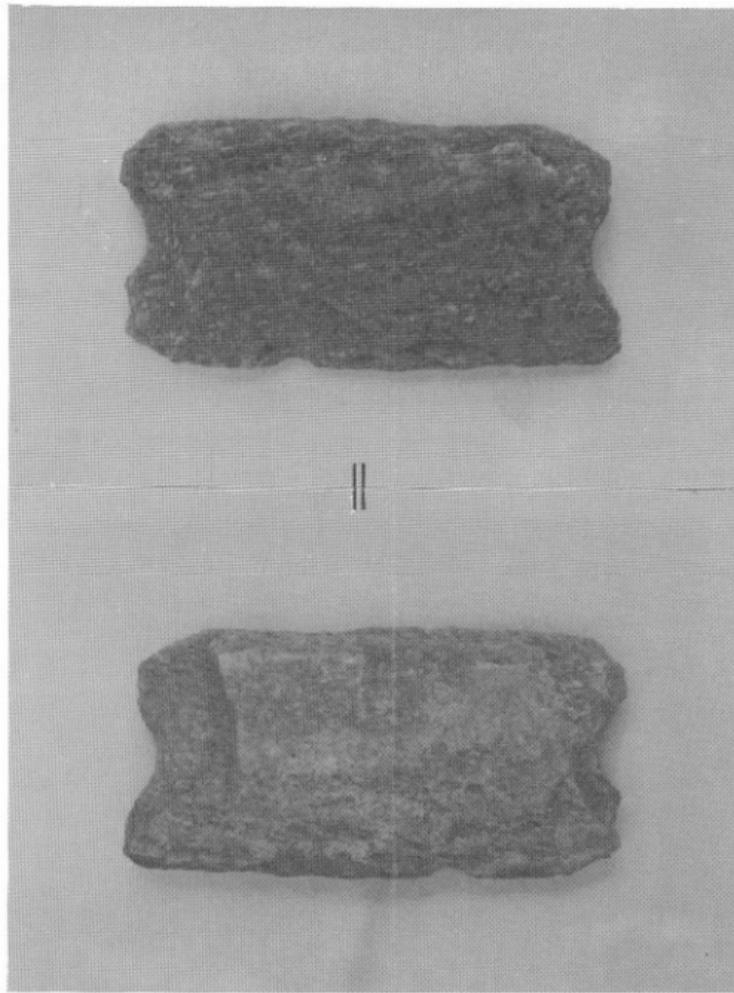
打製石包丁の出土



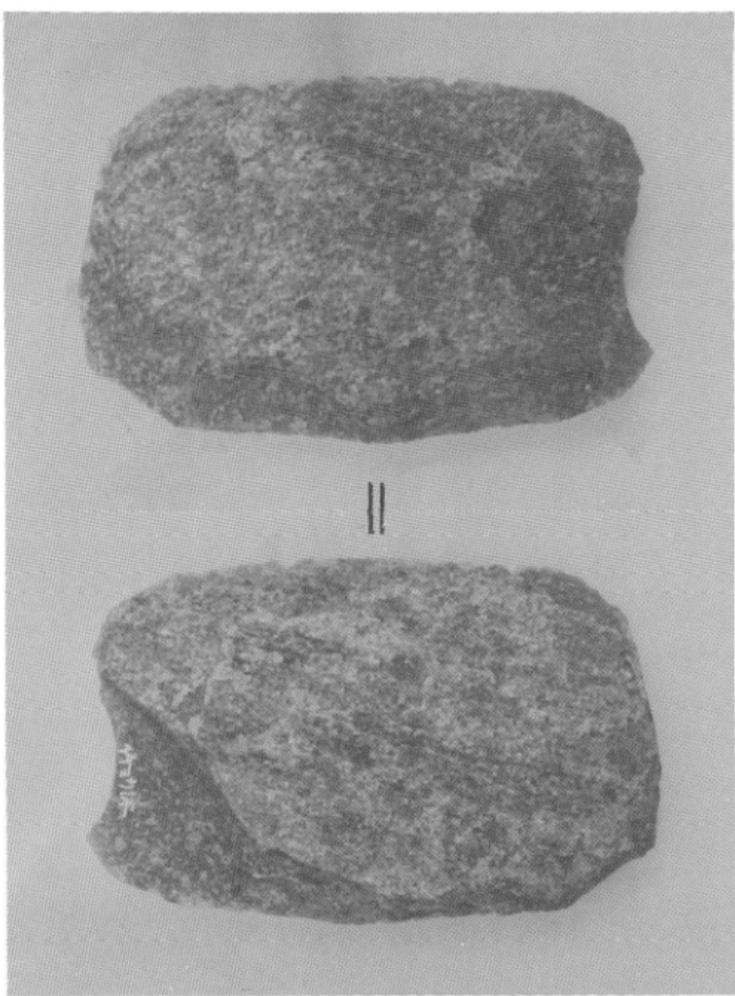
貯 藏 穴



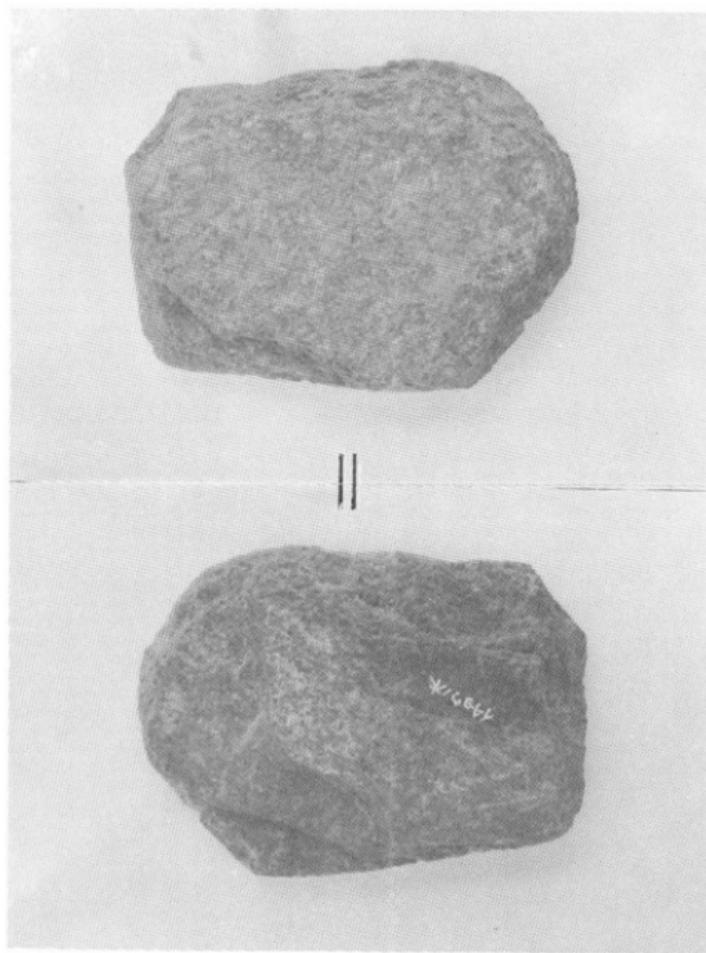
堅 穴 址



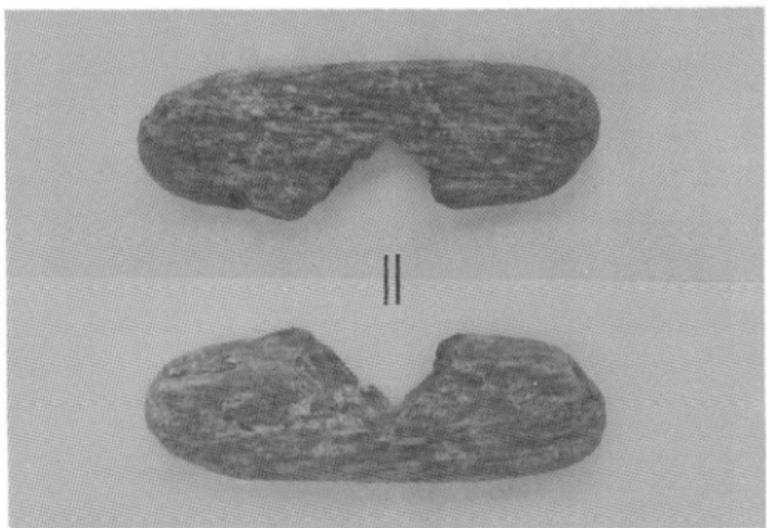
打製石包丁（實物大）



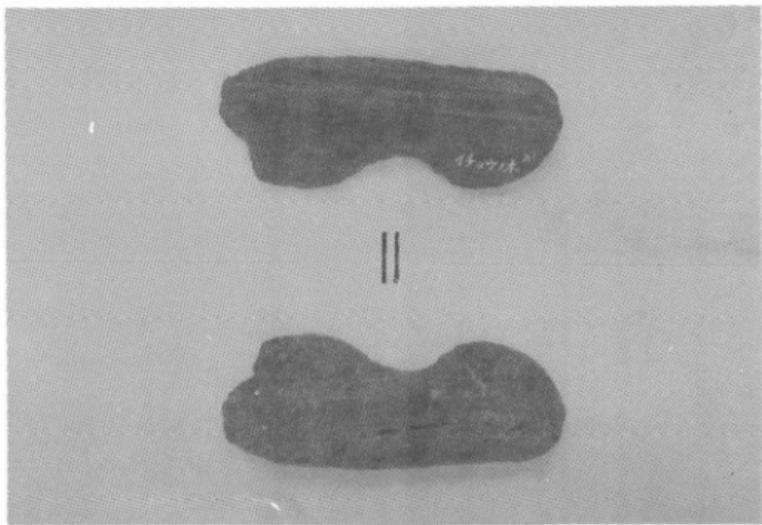
打製石包丁未製品（実物大）



打製石包丁未製品（实物大）



石 錘(実物大)



石 錘(実物大)



発掘調査に参加した人々

銀杏ノ木遺跡の発掘

(高知県長岡郡本山村)

昭和 59 年 3 月 31 日

高知県長岡郡本山村教育委員会

近森謙写堂